

「選挙のパラドックス—なぜあの人が選ばれるのか？」

ウィリアム・パウンドストーン(著)篠儀直子(訳)

青土社 2008年7月2日刊

現在の民主主義の下では、国会であれ、市町村議会であれ、あるいは、小さな委員会であれ、投票が最も頻繁に用いられる最終的な意思表示の方法である。では、どのような投票方法を用いれば、投票した人々の意思が最も適切に反映されるのだろうか。

実は理論的に文句なしの投票方法はいまだ発見されていない。ノーベル経済学賞受賞者のケネス・アローが一般不可能性定理として証明したように、民主的な環境の下で、候補者が3人以上いる場合には、民意を反映させるようなランキングに基づく投票システムを作り出すことはそもそも不可能であることが知られている。

本書はアメリカ合衆国で行われた選挙結果を実証的に分析した上で、投票方法に関する様々なアイデアを歴史的な視点から再検討し、最先端の投票理論を丁寧に解説した、極めて興味深い知的エンターティメントである。

本書を読むと、アメリカを中心に適切な投票システムに関する研究が延々と続しており、中には研究センターを立ち上げて、実際の政治選挙に反映させようと運動する人たちがいることがわかる。少なくとも研究者レベルでは、アローの一般不可能性定理を解決するためには、ランキング方式の投票システムから採点方式の投票システムに移行すべきであるという流れになっていることもわかる。

選挙といえば国政や地方政治を思い浮かべるかもしれないが、大学でも学長選挙や学部長選挙などがあり、投票理論研究者はこのような大学行政における選挙制度に疑問を持つことから研究を始めた人が少なくない。有名な童話作家ルイス・キャロルはオックスフォード大学の数学者であったが、やはり学内の委員会の投票方法に関して考え始めたことをきっかけに選挙制度に関するパンフレットを出版した経緯については本書でも論じられている。

本書のメッセージは「現代世界にはびこる悪に対し、個人としてのわれわれが効率的に戦える方法はほとんどない。おそらく最も有効な方法は、真に確実で正しい選挙を実現しようとする事だろう」と要約できるだろう。評者としては、とにかく選挙に行き投票することを勧めたい。